

# 「もとはこちら」のお話し

No.70 今月のテーマ

勉強会でのお話から



## 喜び上手は 幸福の もと

(平井謙次作 日めくり カレンダーより)

平井先生の勉強会は、毎週月曜日の夜七時から始まり、九時に終わるという勉強会でした。その二時間の講義の中で、先生は、自分が体験した事その全ての原因は自分にある、即ち「もとはこちら」という事について、あらゆる角度から様々なお話しをして下さいました。

私は勉強会から帰った後に、その日の先生のお話しを中心に、私なりに感じた事や考えた事なども少し付け加えながらまとめさせて頂き、ノートに書き残しておりました。

今回は当時のノートの中から、二つのお話しをご紹介します。まず、「自分に与えられた環境の中で、淡々と生きよ」、そして「生かされて生きる」です。

「自分に与えられた環境の中で、淡々と生きよ」 平成三年一月七日

淡々と生きるという事は、言葉を変えていえば、自分に与えられたその環境が、自分の魂の成長にとって最大限に素晴らしく、有難い環境であるという事に早く気付いて、

その環境の中から得るべきもの、学ぶべき事などの、与えられた教えを力いっぱい受け取り、感謝して生きよという事である。

淡々と生きるという事はまた、日常生活の全てにおいて、

小躍りするほど馬鹿喜びするでもなく、また逆に落ち込んだり怒ったり、悲しんだりする事でもない。

日々の時間、空間、そして環境の一切が、何の為にそこにあるのかという事を、心を静かにして深く感じ取る事ができるならば、

そこに何があっても素直にその事を受け入れ、淡々と生きていける自分を発見する事ができるだろう。

北原ゆり筆

例えば病気になったとしよう。

二度と元に戻れぬ身体になったとき、誰でも悲しみ、そして怒り、落胆し、しかし最後にはやはり諦めるしかないだろう。

ではその諦めの心境に至るまでの途中で起きる怒りの心とは、一体、何なのだろうか。

また誰に対して或いは何に対して怒っているのだろうか。

何かのせいで、または誰かのせいで自分はこうなってしまったと、その責任を他に転嫁しているうちは、その怒りはまだまだ軽い。

その怒りや悲しみがもつともつと深くなると、こうなった自分自身への怒りは、どこにもやり場のない深くて重い怒りであり、そして悲しみである事に気付くだろう。

このようにあらゆる感情というものは、最終的には全て、自分自身に向けられる事になる。

そういう運命を避けられなかった自分自身への怒り、嘆き、そして深い悲しみ。何とか防ぐ方法はなかったのかと思う悔いの心。

しかしそれらの心もいつしかまた、自分の力ではもはやどうしようもないのだという深い諦めの心が変わっていく。そして病気をもつたそのままの状態で、生きていくだけである。

そうなれば、病気をしたという事実があるだけで、魂のうえでは、すでに病気による痛みも苦しみも、そして怒りもなく、また喜びもない。

病気のお陰で、色々な肉体的、精神的な経験をさせてもらった姿をそのまま受け取り、病気のままに病気を超えて、淡々と生きていくだけである。

これに反し、「もしもこんな病気になっていなかったら」とか、「あの時、あの人があんな事をしていなかったら、自分はこんな事にはならなかった筈だ」等と思う事は、今の自分も過去の自分も、要は

全ての自分を否定している事になる。

否定からは、怒りや愚痴、妬みやそねみ等のマイナスの事しか生まれてこない。それらは自分自身の心を暗くするばかりでなく、周りの人の心をも暗くしていく。そして「病気をしたが、それでもこういう病気をして本当に良かった」等と言えるようなものは、何ひとつ生まれて来ることはない。

これでは折角病気をした意味がない。苦しんだ意味がない。痛い思い、辛い思い、苦しい思いをした値打ちがない。

病気のお陰で、あるいは家庭的に恵まれなかったそのお陰で、失業したお陰で、と、通常はマイナスとしか思えないこれらの体験の中から、自分に与えられた環境の一切をプラスの事として受け取れるまでに自分の心が成長した時、自分が置かれた環境や体験した事の真の意味を、初めてはつきりと見出せるはずである。そして全ての全てを、ただ有難いと受け止め、淡々と生きていける様になるのである。

絶対的なマイナスなどというものは、どこにもない。考え方、気の付き方で、それらは全て、プラスとなりうるのである。

生まれてきたから、死ぬまで生きる。

もちろんその命は大切にしながら、いたずらに命に執着することなく、死ぬ時がきたら、淡々と死んでいける。

勿論自分から死を望む事もないが、何々のためにと肩肘張って、必死の形相で生きるとか、自分の榮譽とか名誉や財産形成のために生きるでもない。

ただ命ある間は、感謝しながら命をまっとうする。そんな淡々とした生き方が大切である。



「生かされて、生きる」 平成三年一月十四日



いわゆる「生きる」には、二通りの意味合いがある。

即ち生死の意味での「生きる」という場合と、もう一つは、十分に活用され、真の値打ちを発揮させるという場合の「生きる」という場合である。

「生かされて生きる」には、その両方の意味合いが含まれている。

それでは先ず、生死の場合に付いて考えてみよう。

一番わかり易い例が、母親の胎内にいる赤ん坊の場合である。

赤ん坊は母親によって生かされている。

母親の意識の有無に関わらず、胎内にいつたん宿った赤ん坊は、母親の絶対の愛によって育まれる。絶対の愛とは、赤ん坊を生み、育てようとする自然の力の作用である。

その自然の力の作用である母親の愛によって、赤ん坊は生かされて生きている。

ではこの母親は何によって生きているか。

それもやはり自然の力の作用によってである。

食べ物としての動植物の命を、そして水や空気、太陽のエネルギーによって、母親は生かされて生きているのである。

そしてまた、例えば人生に絶望し、自殺を考えている人間が、意識的にその身体を傷つけたとしても、自然治癒力というものによって、本人の意識に逆らって傷は治る方向に向かう。

これは自分の内にある「生命活動を続けよう」とする絶対的な力によって生かされているという事の表われである。

自分の表面的な意識によってのみ、人間は生きているのではない。大自然の力、そして内なる力によって、私達は生かされているのである。

るのである。

この大自然の力を、神という名に置き換えても良い。

次に、今現在自分に備え持ったある力を発揮する事によって、周囲から、より生かされて生きるという事について考えてみよう。

自分に何か出来る事があるとしよう。(実際には、何も出来ない人間などというものは、存在しない。存在する事自体が、即、何かをしているという事であるのだから。)

そしてもしも他の人から、その出来る事をしてほしいと望まれたとしたら、その出来る事をする事によってのみ、そこに初めて値打ちが生まれる。

例えば肩たたきが上手だったとしよう。

しかしいくら上手に肩を叩ける技術や心があったとしても、叩く対象がいなければ、何の意味もないのである。

肩を叩くという技術も心も、生かされる事もないし、生きても来ない。だから、初めからないのと同じである。なぜなら、肩を叩き、相手に気持ちの良さを味わってもらい、喜んでもらう事によって感じる自分の幸福感も得られないからである。

私達は、何かの、或いは誰かの役に立っている自分というものを感じ取れる時、自分の存在を喜び、そして相手の存在を喜ぶ事が出来る。

人間同士だけでなく、自然に存在する全てのものは、互いを生かしあい、生かされあっている。

また直接的にプラスになりあう相手だけでなく、反面教師という言葉ある様に、人の振り見て我が振りをなおす為に、互いが役立ち合っている場合も多いのである。

では最も良い生かし合いとは、どんな形をいうのだろうか。

それは相手の持っている力が十分に発揮できるように、相手の事を手助けし、しかもその手助けをする事によってこちら側も、

自分本来の力がいよいよ磨かれ、結果として自他共に成長していけるような、そういう生き方をする事である。

しかし、そうなる為には、相手の力を引き出すだけの力量が必要となる。

例えば良い教師とは、子供の能力を引き出す能力のある教師であるが、その為には学問的、教育的な面だけではなく、人間としての資質も問われる事になる。

教育者として秀でている事は勿論、人間としての謙虚さや素直さも求められるのである。そういう面で本当に強い教師が、子供の成長を手助けする事ができ、同時に子供によってより育てられて質の高い教師となっていく事ができる。

このように相手を活かすためには、先ず自分で自分を鍛え、相手から学び、相手によって生かされている自分というものを知る事が大切である。

相手を生かせば生かすほどに、自分も相手によって生かされてくるのである。

~~~~~

以上が平井先生の講義を受けて、後に私が書きまとめた文章ですが、さて、「投げられた所で起きる法師かな」という言葉があります。

法師とは、あの起き上がり小法師のことです。起き上がり小法師は、ポンと投げられたその場所が、たとえデコボコであっても、また傾斜地であっても、文句一つ言わず、その場で必死に起き上がるうとします。

投げられた場所というのは、勿論、その起き上がり小法師が自分で選んだ場所ではありません。

また、「アスファルトに咲く花のように・・・」というフレーズの歌があります。出来る事ならその花も、もっと環境の良い場所で咲

きたかったはずですが。しかしこの花も自分に与えられたその場所で力いっぱい生きて、そして花を開かせているわけです。

私達の生きている今のこの環境、この時代も、決して自分で選んだわけではありません。しかし、意識的に選んだ訳ではなくても、それら全ての環境は、無意識の自分が選んだ筈なのです。

平井先生のお話しの中にも出てきますが、「生きる」ということは、自分の表面意識を超えた、絶対の命のなせる作用の結果です。この絶対の命というのは、常に私達の意識を超えて全てに作用し続けております。

私達一人ひとりに与えられた運命、宿命等、全てのものは、その人の過去の生き様にみあったものであり、そしてまた未来の自分にとって、それは必要な事ばかりの筈なのです。自然治癒力の存在によっても分かる様に、命は常に、より長く、より良く生きる事を、望み続けております。過去よりも、もっともっと幸福になる為に、今のこの環境が与えられているのです。

私達はいかにその事に早く気付くかということですが。

気付けば、そこには確かな神の計らいである自然の法則を見て取る事ができるようになります。そしてその瞬間から私達は、全感謝の道を歩む事が出来るようになるのです。



【ご案内】

次回の勉強会は、十一月十日(土)を予定しています。勉強会及び月報については、どうぞ左記までお問い合わせ下さい。

編集発行人 もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP <http://www.motoha-kochira.com>

mail: [data3@motoha-kochira.com](mailto:data3@motoha-kochira.com)

073・461・6300